

日が沈むまで

日本で40年働いた二人の姉妹のあかし

G・M・スピーチリー K・A・リデルス [共著]

Until the going down of the sun

written by G. M. Speechley & K. A. Riddles



伝道出版社

UNTIL THE GOING DOWN
OF
THE SUN

BY
GLORIA M. SPEECHLEY
&
KATHLEEN A. RIDDLES

Two sisters who laboured in testimony
for God in Japan for 40 years.

EVANGELICAL PUBLISHER
TOKYO, JAPAN

目次

10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	
舌で聖書を読んだ人	あれほど大きな石	朝の食事	嵐	いろいろな三章一六節	互いに励まし合いましょう	友だち	ルツ記の金言	年老いた姉妹アンナ	朝ごとに新しい	まえがき
35	32	29	26	23	20	17	14	11	8	5
20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	
主が設けられた日	信仰と疑い	数学は好きですか	〈耳〉雑感	さかさまつげ	有名な母	その子の美しいのを見た	母の生きざまを見て	根がないために	わたしの手を見なさい	
66	62	59	56	53	50	47	44	41	38	

31	30	29	28	27	26	25	24	23	22	21
神の御声(1).....	ひとりの若い女性からの手紙.....	日が沈むまで.....	しらがになっても.....	最善の贈り物.....	ダビデの子のイエス.....	死にぎわの妻の祈り.....	主よ。いつまでですか.....	親切なことば.....	木の葉.....	まろうどイエス.....
98	96	93	90	87	84	81	78	75	72	69
42	41	40	39	38	37	36	35	34	33	32
ペテロに学ぶこと.....	主イエスが訪ねた家.....	お金について.....	シメオンとアンナ.....	マリヤとヨセフ.....	ザカリヤとエリサベツ.....	主のしもべ、教会のしもべ.....	バラの花束.....	火.....	勝利のあとに.....	神の御声(2).....
134	130	126	123	119	116	113	110	107	104	101

まえがき

私をはじめて日本にまいりましたのは一九五三年十二月でした。私は二十七歳でした。どうして母国オーストラリアを離れて日本へ出かけたかと言えば、それはすべて主の導きで、主のみこころだ、と確信しましたから。

本を読むことが好きな私は、外国（オーストラリアから言う外国のこと）で主に仕えている方々の伝記などもよく読みました。また時々そのような働きについての話を聞くことができました。マタイ伝九・37、38のみことばに、「収穫の主に、収穫のために働き手を送ってくださいるように祈りなさい」とあるのでそう祈ると、こんどは自分がどうすべきか、と考えさせられました。祈りながらいよいよ日本へ行って少しでも主に仕えるように導かれて、用意して出発しました。そして一九五三年十二月二十八日に、日本に到着しました。

しばらく前からリデルス姉妹と手紙を交換していましたが、その日はじめて顔をあわせて会いました。リデルス姉妹はみ手に導かれて一九五二年五月に北アイルランドのベルファースト市から日

本へまいりました。それから今まで五十年以上、私たちはみ手に守られて一緒に生活して、たがいに助け合い、主様に任せさせていただきました。み約束にあるように、主はすべての必要を満たしてくださいました。今年、リデルス姉妹は八十八歳、私は八十一歳になります。

さて、日本に到着してまずしたことは、日本語の勉強でした。「これは本です」からはじまりました。一九五五年四月から、まだ日本語学校にかよいながら、伝道出版社で奉仕するようになりました。日本へ行く前の十年ほど、私は事務員として勤めましたので、それは私に適当な働きでした。少しずつ月刊誌の原稿の手伝いもできるようになりました。数年のちに「婦人メモ」のページができましたとき、他の姉妹たちの助けを受けて私はおもにその責任をとりました。

一九九四年九月に私たちは北アイルランドへ帰国するように導かれました。日本を離れると考えると、なんとさびしい気がしたでしょうか。永年愛し合った兄弟姉妹、日本の兄妹や外国の兄妹と別れて日本を離れるのはたしかにつらい経験でした。

昨年あたりから、私とリデルス姉妹が書いた原稿からいくつか取り上げて一冊の本にしたらいかがでしょうか、との話が出ました。それにしたがってこんどこの本が出来上がりました。少しでも益となるように願って愛するみなさんにこの本を贈りたいと思います。

十五歳の誕生日の前の日に救いの確信を持つことができてからもう六十六年がたちました。忠実

なる主はよわい者をお守りして、すべての必要を満たしてくださいました。これからも主に寄り頼んで、「日が沈むまで」、忠実に主に従ってあゆみたい、と願っています。

言うまでもないですが、私たちにはこれほどのよい日本語を書く力がありません。すべては愛する森田寿子姉妹の苦勞でございます。愛姉は力をつくして私たちの文章をきれいな日本語に書き直してくださいました。心からお礼を申し上げます。主に報いられますように。

二〇〇七年十二月

G・スピーチリー

編者注…リデルス姉は、二〇〇八年一月十七日、信仰を全うして平安のうちに天に召されました。

1 朝ごとに新しい

1〜30の書き手はスピーチリー姉です。

私たちが滅びうせなかったのは、主の恵みによる。主のあわれみは尽きないからだ。それは朝ごとに新しい。「あなたの真実は力強い。主こそ、私の受ける分です」と私のたましいは言う。

哀歌三・22〜24

みなさんは、どんなお気持ちで新年をお迎えになったでしょうか。私は、エレミヤがここに書いたのとおなじ気持ちで新年を迎えました。

エレミヤがこう記したとき、エルサレムは長く敵軍に包囲されていてだれも出入りできず、そのあわれさは筆舌に尽くしがたい状態でした。哀歌二章一〇〜一二節、同二〇節などを読むと胸をつかれます。私たちも過去一年、いろいろな経験をしましたが、それほどひどい経験をした人はいないでしょう。でも、私たちもそれなりの必要を主に満たしていただいたので、主の恵みは朝ごとに新しく、主のあわれみは尽きない、と告白することができます。

主はまちがいなく、ご自分の子どもたちの必要を満たしてください。ただ、主のみわざは多様なので、主がご自分の子どもが必要を満たす方法も一様ではありません。

列王記に、私の大好きな話がふたつあります。両方とも未亡人が主人公で、ふたりとも大きな問題に直面して悩んでいました。ひとりにはユダヤ人で、もうひとりには異邦人です。彼女たちはそれぞれ、神のしもべエリヤとエリシヤを通して神の恵みを経験することができましたが、神はまったく違う方法で、彼女たちの必要を満たしてくださったのです。

列王記第二の四章の話を子どもに話すとき、私は「困ったお母さん」という題をつけます。母親にとつて、自分の子どもが苦しみに遭うことほどつらいことはありません。この四章の母親は、夫に先立たれただけでなく、夫が残した借金を返すことができませんでした。すると貸し主は、夫が返せないならふたりの息子を奴隷にする、と言ってきたのです。エリシヤに助けを求めた母親は、エリシヤに教えられたとおり、近所の人たちから器を借りてきて、手もとにあつたわずかばかりの油をその器につぎました。すると油がふえて、たちまちたくさんの器がいっぱいになり、彼女の必要はその場で十分に満たされました。彼女は油を売って借金を返し、残りのお金で子どもたちと生活することができたのです。

列王記第一、一七章の未亡人の場合は違います。エリヤが神に命令されてシドンのツアレファテ

に行つたとき、彼女は町の門で二、三本のたきぎを拾い集めていました。それを持って帰り、少しだけ残っている油と粉で、自分と子どもが最後に食べるパンを作るつもりでした。けれども、彼女がエリヤの願いに応えてまずエリヤのためにパンを焼くと、主の約束どおり、雨が降る日まで、かめの粉は尽きず、つぼの油はなくなりませんでした。いっぺんに二日分のパンは作れませんでした。が、次の日になると、その日の粉と油が与えられたのです。

このふたりの必要を満たしてくださつたのはおなじ神でした。与えられたのは両方とも油でしたが、方法と量は違いました。ひとりの人は、すぐに余るほどたくさん、将来の分まで頂き、もうひとりの人は、きょうの分だけ頂いて、あすの分はあすまで待たされました。いずれにしても、神は忠実ですから与えてくださいます。主の恵みは朝ごとに新しいのです。

私たちは日々の食べ物には困らないでしょうが、それでもいろいろなものが必要としています。それは物質的なものかもしれないし、あるいは霊的なものかもしれません。また、心の悩み、家庭の問題、将来についての迷いなどがあつて、その答えがほしい場合もあるかもしれません。愛するみなさん。すべて主にまかせましょう。主が間に合わなかつたことは一度もありません。